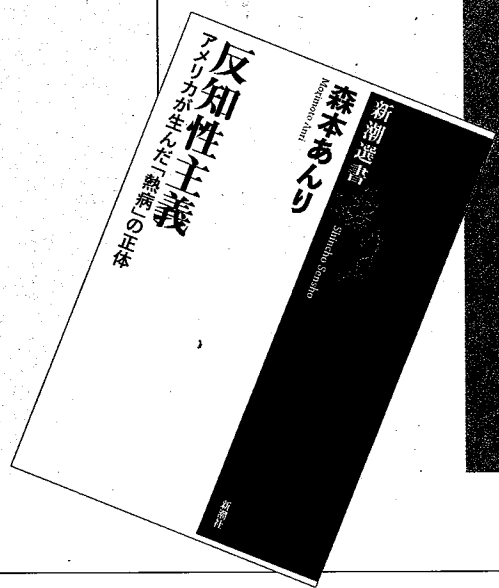


森本あんり 著
新潮社

四六判変型284ページ/1300円(本体)

『反知性主義』

アメリカが生んだ「熱病」の正体



評者 棚村恵子

東京女子大学現代教養学部准教授

本書の帯には「いま世界でもっとも危険なイデオロギーの根源」、副題には「アメリカが生んだ『熱病』の正体」とあり、なんだか恐ろしい本のようですが、中身はユーモアに富んだ面白い、アメリカ・キリスト教史入門書です。同氏の『アメリカ・キリスト教史——理念によって建てられた国の軌跡』（新教出版社）と併せて読まれることをお勧めします。

ビジネスと結びつき、宗教改革的 信仰を変質させたアメリカ型キリスト教

本書ではまず、17世紀のピューリタンたちの極端な知性主義の説明がなされます。牧師養成のために創立されたハーバード大学は知的な聖職者を輩出しましたが、その反動として熱情を重んじる信仰復興運動（リバイバル）を準備する土壌となりました。リバイバルの「熱病」はアメリカの広大な自然と空間の中で、伝統や権威に対する人々の嫌悪、平等主義と結びつき、「反知性主義」を育てました。それは独立革命に寄与することにもなります。

さらに、政教分離を定めた憲法により、宗教の民主化に拍車がかかる中、大衆伝道者フィニャーらによってリバイバルのテクニックが工夫され、19世紀前半にはメソジストやバプテストが飛躍的に伸張します。世紀後半からは、牧師ではないムーディーや大リーガーのサンデーらがリバイバルの組織化、ビジネス

化を図って大都市で大成功を収めます。

森本氏は、本書においてリバイバルを「熱病」と呼び、アメリカにおいていかに宗教改革的キリスト教が変質していったか、また、ビジネスと結びつき、この世での成功の手段になったといったかを皮肉を込めて論じています。しかし、一方、「反知性主義」の定義では、それは「知性と権力の固定的な結びつきに対する反感」であり、「新しい価値の世界を切り拓くために必要なのだ」と本書の最後に肯定的にも述べておられますから、帯の表現はセンチシヨナルすぎるのではないかと思います。最後に評者は、本書で興味深く論じられるアメリカ型キリスト教の話は他人ごとではなく、アメリカの宣教師の遺伝子を受け継ぐ日本の教会にどのように影響があったのか、また、現在もあるのが気になります。Ω